

10. 東奈良史跡・東奈良史跡公園

東奈良遺跡（ひがしならいせき）は、大阪府茨木市の南部、南茨木駅から東側一帯にある、弥生時代の大規模環濠集落や古墳時代、中世の遺構を含む複合遺跡です。

1973年（昭和48年）、大阪万博とともに新設された南茨木駅周囲一帯の大規模団地建設の際に発見されました。

南茨木駅の東300メートルに、出土品を所蔵・展示した「市立文化財資料館」があります。

銅鐸鑄型出土記念碑

東奈良遺跡には、二重の環濠の内部に高床倉庫など大型建物や多数の住居があり、外部には広大な墓域もあった。発見された工房跡から、銅鐸の鑄型が35点も出土しており、ほかにも銅戈・勾玉などの鑄型が発掘されている。この鑄型で生産された銅鐸が、近畿一円から四国でも発見されている。



この集落が、奈良県の唐古・鍵遺跡と並ぶ当時日本最大級の銅鐸や銅製品の工房遺跡であり、弥生時代の日本の数多くの「クニ」の中でも、各地に銅鐸を配布することができるほど政治的に重要な位置を占めていたことがうかがえます。

また、高さが14.2センチメートルの小さな銅鐸が見つっている。銅鐸の起源は解明されていないが、この銅鐸がその謎を解く鍵となる可能性もあるという。

この付近は「沢良宜（さわらぎ）」と呼ばれ、主な神社に「佐和良義神社」があり、迦具土神がまつられている。カグは銅の古語であり、サワラギもサワラ（銅器）ギ（邑）となることから、この一帯が銅製品の加工と関係が深かったことがうかがい知れます。

2013年（平成25年）10月から行われた発掘調査で、弥生・古墳時代の溝などのほか、牛の足跡などが残る中世の水田跡も見つかりました。

東奈良史跡公園

公園は南北20m、東西40mくらいの小さなもので、出土品などを展示している「短い緑道」で、園路の両側に、展示物がポツポツと並んでいます。